

いのちの元「種子」に魅せられて



4月24日晚春の穏やかな光の中、飯能にある野口種苗研究所に伺った。

食が大事と人は単純にいうけれど、種にまで言及する事はない。種に行き着く活動をしている菜の花エコに参加できて、改めて幸運を感じています。そしてかつて読んだ、秋月辰一郎医師が自身の体験を元に書いた「長崎原爆記」を思い出した。

長崎に原爆が落とされて、病院は破壊され医師やスタッフ全員が被曝した。

始めは爆撃が原爆だとも知らない中で、秋月医師は以前に放射線科にいた経験から、病院に貯蔵してあった物で玄米のおむすびと味噌汁を作り、それをずっとやり続けました。その結果医師もスタッフも、誰ひとりとして原爆症を発症しなかったのです。「長崎原爆記」は世界中で読まれ、のちに原子力発電所の事故が起きた Chernobyl でも、日本から沢山の味噌を輸入したそうです。

大豆や味噌が体にいいと云っても、人はすぐに忘れる習性があります。今回、その大豆を含めた主要農産物が危機にさらされていると知りました。日本の風土が育てた伝統は守る義務がある。菜の花エコに参加して、一層その思いを強くしています。



岸本政子

野口種苗研究所をたずねて



先の見学会で訪れた野口種苗研究所。そこで買い求めた野口勲著「いのちの種を未来に」を読み、種の現状を知り驚きました。よく耳にする F1 種、固定種、遺伝子組み換え技術などについて書かれていますが、F1 種は効率よく生産・流通することを目的として開発されたので、味は二の次になっているとの事。そういえば、子供の頃のトマトは独特的の匂いがしたし、牛蒡も風味がありました。イチゴの甘い匂いは忘れられません。

野口種苗研究所では、固定種の種を販売しています。種子の進化を手助けしながら健康な野菜を育て、本来の味を楽しみつつ自家採種をして、その事が地域起こしの一助になることを夢見ているそうです。

遺伝子組み換え技術は、遺伝子操作によって種子の次世代以降の発芽を抑えてしまい、農家による自家採種を不可能にする為に開発されたとか。こんな恐ろしいことが許されて良いのでしょうか？

小さな小さな種には歴史がありドラマがあることを、そして店頭で目にする野菜の育つ過程を、友達・家族にも話して大いに関心を持ってもらいたいと思っています。



安田たか子

会員募集

- * 農業が好きで、資源循環を体験したい人
- * 環境・食育学習に関心がある人
- * バイオディーゼル燃料に関心がある人
- * カンパで応援したい人

●お問い合わせ 〒202-0005 西東京市住吉町4-17-3 茂木 千佳子
E-mail:hoyananohana_2003@yahoo.co.jp

会費/年
正会員—1,200円
賛助会員—1,200円

編集後記



サミットに参加した女性陣は、全国各地から集められた菜種オイルのティスティングを。同じ品種でもこんなに違う！とビックリ。歐州などではオリーブ油のように、そのままかけるのが主流だそう。(S)

西東京 菜の花エコ・プロジェクト

菜の花は地球環境を守る新エネルギー

NO.20

発行日 2017.8.15

発行：
西東京 菜の花エコ・プロジェクト
〒202-0005 西東京市住吉町4-17-3
発行責任者：茂木 千佳子
E-mail:hoyananohana_2003@yahoo.co.jp
HP:http://www.geocities.jp/hoyananohana_2003/whats.html

私たちと水・食べ物エネルギー農が生きるまちを創りたい！

2017年3月 西東京 菜の花エコ・プロジェクト総会と講演会を終えて

西東京市民は20万人を突破しました。市内の緑の多くは農地に頼っています。しかしその農地も相次ぐ相続により次々と開発されていく姿を、皆様はどう思われているのでしょうか？開発と同時に緑被率も下落の一途をたどり、今はや20%台になっています。



この春、菜の花エコ総会後に、公民館市民企画事業による講演会を開催しました。テーマは『私たちと水・食べ物・エネルギー、そして農業からまちを考える』。講師は「東京大学農学機構」准教授の宮澤佳恵さん、「ノウマチ西東京環境保全協議会」から若尾健太郎さん、「まちにわひばりが丘」から高村和明さんの30～40歳世代。地域に、農あるまちと地域コミュニティづくりを目指して活動中です。農あるまちづくりを実践している希少な団体と、共に力を合わせていきたいと思う記念すべき一日となりました。

消えゆく農地を嘆くばかりではなく、市内の遊休地を積極的に活用したいものです。幅広い市民の豊かなコミュニティの場となれば、もっと住みやすい西東京市になる事でしょうね！

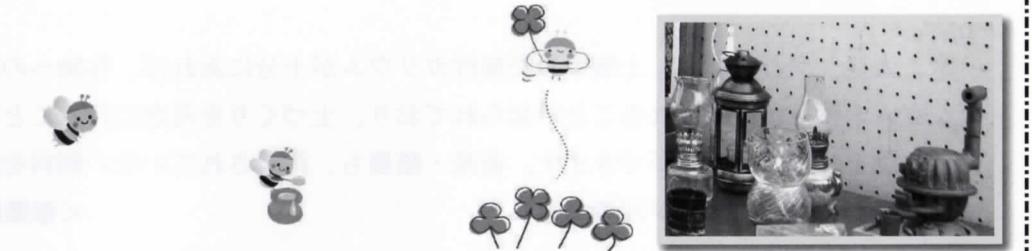
本会も約15年を経る中で、2年前から環境保全・資源循環を軸に事業の再検討を進めてきました。15間年のナタネ・ひまわり栽培と搾油の経験を活かし、地産地消のお菓子づくりから食・農・エネルギーを考えていきます。

茂木千佳子



2017 アースディー西東京に参加して

5月最後の日曜日、いこいの森公園で開催されたアースディーはお天気に恵まれて、大勢の市民の参加がありました。菜の花エコのテントでは朝からたくさんのメンバーが手伝っていて、いつも活気があります。圧搾式の搾油機を持ち込み、ナタネの搾油デモンストレーションと、パンにつけて油を試食してもらい、エコ活動をPR。絞りたてのナタネ油はほのかに香ばしい味。その他に都筑さんの灯りコレクションも展示して、火打石や原始時代の火おこし道具などを実際に試してもらいました。荒井真木



原子力災害からの農業再生



今年の菜の花サミットは福島県で開催という事で4月23日、日帰り組4名で(他1名は前日から参加)南相馬市へ。外環自動車道から常磐自動車道に入ると、山の木々は花盛りで春らんまんのドライブ。



福島県に入り、浪江町や双葉町の標識が見えてほどなく放射線量を示す巨大な表示板が現れ、数キロごとにその地点の数値を知らせていきました。数値はだんだんと上がり、やがて「この先自動二輪車通行禁止」の表示。しばらくすると放置された田んぼや荒れ果てた畠、整然と並んだ低レベル放射性廃棄物の大きな黒い袋。そして無言で抵抗しているかの様な無数の太陽光パネル。そこに生活していた筈の人々の姿は見えず、被災地の現実が迫つて来るような道程でした。

南相馬市内で行われた菜の花サミットは二日目。私が参加した第1分科会は「原子力災害からの農業再生～食農の安全・安心～」。大学の先生や県の農業センターの方、民間のNPO法人の方達がこの6年間の戦いの報告をされました。話を聞いている内に福島の人々の現実と都会に住む人達の6年間では、意識の差が広がってしまったのでは…と感じました。被災地に住んでいる人々は未来を信じて、前に進んでいかなければならぬ。しかし東京などにいる人達は、3.11の事より現在の生活に意識が向いてしまっているのではないでしょうか。過去の夢のエネルギー原子力発電、今あの事故の教訓を、都会に住んでいる人々がどのぐらい真剣に考えているのかを私は知りたいです。トイレのないマンション問題、どうするのでしょうか？

<以下当日の資料より抜粋>

山菜、キノコ、野生動物の採取、および漁業は、自然の恵みを頂く「狩り」の行為です。それに対して農業は、作物を「育てる」行為であり、「どこに」、「何の作物を植え」、「どのように栽培するか」、自然の摂理に制約されつつも、人間側に一定の裁量がある営みです。つまり農業は、農業者に一定の制御可能性(コントロール)があり、ここに放射能汚染対策を生産段階からする余地があります。

例えば、放射能に汚染された農地であれば、セシウムを吸収しにくい作物を植えることができます。放射能汚染が軽微で、セシウム供給がなければ、放射能は移行しません。放射能汚染の実態把握は、栽培計画や土地利用を検討に欠かせず、全ての放射能対策の根幹です。

米、大豆、ソバ等では、土壤中の交換性カリウムが十分にあれば、作物への放射性セシウムの移行が抑制されることが知られており、土づくりを丹念に行うことで農作物の汚染を軽減することができます。畜産・酪農も、汚染されていない飼料を用いれば、お肉や乳製品の汚染が回避できます。

<都築康彦>



6月3日 全体会開催



特定非営利活動法人ワーカーズコープの川地素睿(もとえ)氏をお迎えしてお話を伺いました。今年の菜の花サミットの報告もあり盛り沢山でしたが、エコ活動の確認と会員同士の交流もできました。

<ワーカーズコープ川地さんの話>

2017「アースデイフェア in 西東京」のイベントの電源は、ワーカーズコープが製造したBDF燃料を使用した。ワーカーズコープでは、出資・運営・労働を担いながら地域に必要な事業を作り出すまちづくりをすすめてきた。「コミュニティづくりは、農業も含め社会全体で支える」を基本に、社会的引きこもりの人や障がいを持っている人も働くことが当たり前にしたいと考え、まず菜の花から搾油そして廃食油回収、BDF製造へと事業展開を始めた。

宮城県大崎での菜種搾油・千葉県成田空港の廃油回収・大田区食品会社跡地で廃油の再利用・武蔵村山コミュニティバスにBDFなど、地区内で利用することで地域内経済を動かす。福祉関係では、地域の親子や子どももの為の食堂にも取り組んでいる。エネルギーは自分の目で見えることが大事で、廃食油回収拠点などで、城南信用金庫の理解と協力を得ている。小さい拠点をつなげ面として埋めて行くことで、環境問題の解決にも向かっていくとのことでした。

<福島からの報告>

南相馬市で開催された「菜の花サミット」。原発事故で住民が避難されている場所の荒涼としている様子が伝わってくる報告でした。現地に置かれている最終廃棄物は東京ドーム8個分程で、除染はまだその程度しか出来ていないという事です。エコ会員の岸本さんは福島県石川町出身。日本有数のウラン鉱採掘の地で岩盤が強固な為、3.11の地震では被害がなかったものの、福島というだけで今だに風評被害の影響があるそうです。

<井筒旦子>

楽しみなエコの畠



私は退職後何にも興味がわからず、唯一の趣味だったゴルフづけの毎日でしたが、昨年公民館の「農業を知る講座」を受講して農業の楽しさに目覚めました。土づくり・種まき・苗の定植・毎週の草取り・追肥などの栽培の基本、更に新鮮な野菜のおいしさを体験し、増え野菜づくりにのめりこみました。

今年に入り講座が終了した後、どうすれば野菜づくりの機会が得られるのかと考えていた時に出会ったのが、この菜の花エコでした。インターネットで調べたところ、この活動は全国各地で展開されていて、美しい菜の花の小さな実から絞られる菜種油、更に使用された油のリサイクルを通じ、自然の輪廻を紡ぐ活動を続けている素晴らしい集団である事を知りました。

最近の畠の様子を紹介すると、春先に奇麗に花を咲かせていた菜種は刈り取りました。しばらく乾燥させて、先日脱穀したところです。この実から油を搾(しぼ)るのを楽しみにしています。

会員交流の為の野菜も実りました。黄色いミニトマトは本当に甘く、おいしく頂きました。作業後の喉を潤すスイカの収穫ももう直ぐとの事、楽しみです。

また、もうひとつの油糧作物であるヒマワリも種を蒔きましたので、早く花を見たいと思っています。

<荻野康一>

